

在宅寝たきり老人の四季における寝床内気候の実態

長野県短大

○中山 竹美

林 千穂

〈目的〉長期寝たきり者にとり、褥瘡は深刻な問題である。褥瘡発生の原因として様々の要因が指摘されているが、中でも局所の湿潤はその大きな誘発要因の1つと考えられ、寝具の乾湿は褥瘡予防上重要な課題となっている。

本研究では多様な温熱環境下にある在宅寝たきり老人の寝床条件の実態を把握し、寝床内気候改善のための資料を得ることを目的に寝床内温湿度および寝室内温湿度の測定を四季について行なった。

〈方法〉長野市内の寝たきり老人5名(年齢75~96才, 男2名女3名)を対象に、1992年6,8,10月および1993年2月の計4回、在宅寝たきり老人宅で寝床内温湿度(温湿度データ収録装置TRH-DM2 神栄)および寝室内温湿度(温度湿度記録計シグマII型 佐藤計量器)を48時間連続測定した。さらに、使用寝具類およびその素材、使用法、また生活の様子(清拭、オムツ交換等の時間帯)も同時に調査した。寝床内の測定部位は褥瘡好発部位とされる肩および腰(体に近い層から順に第1層, 第2層の2ヶ所)とし、いずれも敷布団側とした。

〈結果〉(1)寝具条件はそれぞれの事情(オムツの有無等)により異なり、5名中2名はエアーマットを使用していた。エアーマット使用者は腰の第1層においてエアーマット無しより絶対湿度が低く、夏は特に顕著であった。(2)終日寝たきり者と昼間ベッド上で起き上がっている人では、昼間起き上がっている人の方が腰の第1層の絶対湿度は夜間も低く保たれている。(3)室内の温湿度は、相対湿度は四季を通して平均70%前後を示したが、温度は季節差が大きかった。